

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4271401657		
法人名	株式会社日進開発		
事業所名	グループホームさくらほうす		
所在地	長崎県南島原市有家町山川21		
自己評価作成日	令和 4年 6月 27日	評価結果市町村受理日	令和 4年 9月 8日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/42/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ローカルネット日本評価支援機構
所在地	長崎県島原市南柏野町3118-1
訪問調査日	令和 4年 8月 20日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

「さくらほうす」では9名と少人数ですが、それを活かした対応ができ介護理念を念頭に置き入居者様への思いやりを持ち接しています。職員1人1人が自覚を持ち「さくらほうす」の明るい家庭的な雰囲気は崩さず生活をして頂いています。地域との交流に関しては、減少しつつありますが地域との繋がりは崩さずに共に取り組んでいきたいと思ひます。医療面では月1回の嘱託医の往診、修1回の訪問看護師の診察、職員の中にも看護師の資格を持っている者もあり相談をしながら健康管理に努めています。「さくらほうす」での明るく家庭的な雰囲気は崩さずに入居者様1人1人に合った生活を提供できるように共に生活し支援していきたいと考えています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

当ホームの周辺には商業施設や市役所があり、利便性の良い立地にある。長引くコロナ禍において、職員はホーム理念の一つでもある「健康管理の徹底」を心掛け、入居者の日々の生活を支援している。地域交流は自粛傾向が継続している現状であるが、地域の子ども会とは交流があり、密にならない方法でホームの七夕祭りには参加してもらいほか、子ども会の神輿がホームの前を通る時は、入居者がテラスから見学するなど、地域の子ども達との交流を通じて入居者の楽しみと笑顔に繋がっている。職員はホーム便り(さくら通信)と一緒に入居者の詳細な状況を毎月手紙に書いて家族へ送付しており、面会制限が続く中、家族の安心感へと繋がっている。職員のスキルアップにも積極的に取り組みながら職員同士が良好なチームワークを築き、働きやすい職場環境を整備している。明るく家庭的な環境のもとで職員が入居者一人ひとりに寄り添ったケアに努めているホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

ユニット名グループホームさくらはうす

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	玄関先の目が届く所に掲示し毎月のスタッフ会議の中で月の目標を理念に添ったものを取り入れる様にしている。	職員は理念である「健康管理の徹底・楽しい食事・優しい声かけ・快適な施設」を日々心掛けながら入居者支援に努めている。コロナ禍である為、特に入居者及び職員の感染対策と健康管理の徹底に取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍でここ数年は自粛・中止が続き自治会の子供会との繋がりを継続できる様、連携を取り七夕飾りを届けて頂く事ができ対応は図れている。	ホームは自治会には未加入であるが、地域の子ども会とは交流があり、毎年ホームの七夕祭りには子ども達が参加し入居者の楽しみと笑顔に繋がっている。コロナ禍前は地域の文化祭に入居者の作品を展示したり、高校生のボランティアの受け入れも行っていった。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	福祉体験は感染対策上の問題もあり学校側からの依頼はない。活かし切れているとは言えない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍で直接的な開催はできておらず、2か月に1回の開催についてはその度、広域へ現状を説明し書面での報告を行っている。	運営推進会議には市の福祉課職員や近隣住民、家族の代表が参加しているが、コロナ禍により今年度は書面会議にてホームの状況を報告している。運営推進会議での報告内容については、書面で入居者家族にも郵送し、運営の透明化を図っている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	支所も近く不明な点は相談の連絡や足を運ぶ事も多い、又生活保護の方に関する事なども連絡しやすい良好な協力関係であると思えます。	市の担当者とは運営推進会議への参加以外にも、日頃より連携を図るよう努めており、最近ではコロナワクチン接種について相談するなど連携している。尚、市よりリモート研修の案内があるが、ホームのインターネット環境の整備状況が整わず参加が難しいことが窺える。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	防犯上夜間帯は玄関の施錠を行っていますが現在身体拘束該当者なし。 社内の身体拘束廃止委員会の参加がコロナ禍で開催されず各部署内での話し合いに留まる。	ホームでは身体拘束に関する指針やマニュアルを整備し、身体拘束をしないケアの実践に努めている。コロナ禍により身体拘束委員会や研修会の開催が難しく、職員会議で話し合うことで代替しているが、管理者は身体拘束に関する全体的な知識・認識を再周知させることの必要性を感じている。	組織的に身体拘束・虐待の意識を徹底させていくためにも例えば年間研修プログラムに「身体拘束」、「虐待防止」の研修を組み入れるなど身体拘束適正化の研修を定期的に行い、職員の意識向上に繋げることを期待する。また、3か月に1回以上の身体拘束適正化委員会の開催が求められていることから、同委員会が本社で開催できない場合の具体的な代替開催方法を検討し明確にしておくことが望ましい。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待はないと認識していますが何気ない言動が精神的な虐待になり得る事を念頭に業務に努める		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	社内研修の参加で学ぶと同時に今回活用を検討した方がいましたが、中々本人様からの同意を頂ける説得が出来たとは言えないが社協担当者の協力を得て活用できました。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	管理者・施設長が高騰説明での説明を行っている。 気軽に連絡して頂けるように心がけている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会委制限中もあり十分な対応は出来ていなかったが毎月発送する「さくら通信」や担当者からのお手紙を添えて報告させて頂くなどご家族様に寄り添ったものとしている。	コロナ禍における面会制限により、家族のコミュニケーションは電話でのやり取りが主となっている。職員は毎月、入居者の状況等を手紙に書いて報告しており、家族の安心感に繋がっている。職員は家族から聞き取った意見等は申し送り帳に記載し、職員間で情報共有を図り入居者支援に活かすよう努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月スタッフ会議を開催し意見や提案を聞く機会を設けている。	管理者は毎月の定例会議を通じて、また、必要時には適宜職員の意見を直接聞いて運営に反映させている。職員の提案による備品の購入や交換などもその都度行うほか、年1回、本社より個別に職員面談を行う機会があり、職員自身の目標設定や取得したい資格、待遇面等について意見を聞き、職場づくりに活かしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	希望に添えるような休みを出すように努めているが急な勤務の交代にも協力的と感じる。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	コロナ禍のため研修の機会は減っていたが少しずつ開催できている。現在介護福祉士1名受講予定		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍で交流する機会は減少している。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	生活歴、行動パターンを把握し表情や言動を細かく観察する。コミュニケーションを取りながらご本人様の様子などを傾聴するように努める。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前に入室が現在困難な為、パンフレットや電話での説明を丁寧に行うようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	経歴・病歴や日常生活の中で観察し得た情報を職員全員で共有しすぐ対応できるように取り組む。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	その方が出来る事を一緒に探し出し「約に立っている」「まだ出来る」との思いを尊重した関係作りに努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	毎月「さくら通信」とお手紙を発送しご家族様へ報告させて頂いている。遠方の方へは折を見て直接会話して頂けるように配慮している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍 外出・面会の機会が減少しているが毎週日曜日10時には妹様から電話が入る方に対し、全てのスタッフが電話を取り次ぐだけでなく先方(妹様)の体調を気遣う様子が見られる。	コロナ禍以前は、盆や正月などに外泊の支援を行っていたが現在は自粛している。現在、面会制限によりホームへ訪問する方は少ないが、入居者へ中元が届く事もあり、本人の友人関係などその方が大切にしている関係を継続している。地域の子ども会の神輿が通る時にはホームのテラスから見学し、声を掛けるなど、馴染みの関係が継続できるよう支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	レクレーションや体操を一緒に行い楽しめる工夫をしたり入居者様同士が会話をしながら共同で作業できるように提供している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	基本情報やアセスメント等必要に応じた情報共有。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	表情や言動から思いを汲み取り理解できるように支援する。	職員は入居者とゆっくり一対一で対話しながら、一緒に歌を唄うなど、落ち着いた空間で本人の思いを伺っている。家族より入居者へ酸素を飲ませたいとの要望があり対応しているケースもある。入居者より聞き取った意向等は申し送り帳に記載し、職員間で情報共有を図り支援に活かすよう努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	生活の中での会話を通じて以前の生活歴を聞き出す機会を作りこれからの生活環境に活かしていく。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個人記録や申し送りノートを活用し共有できるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	月1回のスタッフ会議を行い各入居者様について話し合う。又、担当者を配置し目標達成度や支援について検討する。	入居者の思いや意向をもとに、毎月の会議において職員が意見を出し合い、介護計画を作成している。介護記録に介護計画の目標を記載することで、職員は常に目標を確認しながら、日々のケアを実践している。介護計画は概ね6か月毎に見直しを行っているが、入居者の状態に応じたその都度の見直しも行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個人記録や申し送りノート・排泄チェック表などを活用し情報共有。 特記・重要事項にはマーカーで色分けをしチェックする事で把握しやすい工夫している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	申し送りノートを活用し情報共有。その時の状況に合ったサービスの提供を行うようにしている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍の為感染対策を第一と考えホーム内の生活が主体となっておりますが、今後は少しずつ参加出来るようにしていきたい。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	月1回の委託医の往診・週1回の訪問看護の診察を受け適切な処置が出来るようにしている。又、受診前にはご家族様に説明と意向を確認しその後の報告も密に行っています。	ホームでは委託医の訪問診療がある為、入居時にこれまでのかかりつけ医の変更を希望する入居者がほとんどであるが、本人や家族の希望により、入居前の医療機関を継続する事もできる。専門医療機関など他科への受診は職員が同行し、受診結果は、その都度家族へ電話で報告している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週1回の訪問看護を受けており職員内の准看護師と相談の上助言や指示が得られている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	面会制限はあるが可能な限り連携室と取り合って情報を共有。ご家族様に代わって備品や衣類等の持参も行っている(入院経過報告書の作成)		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	ご家族の意向や主治医との相談の上今後の方針を決定するとしているが、現状では看取りは行っていない。今後の課題として認識している。	現時点ではホームでの看取りは行っていない。終末期における支援内容は入居時に家族へ説明し同意を得ている。今後は看取り支援を行う方針であり、ホームでの看取り支援の体制整備に向け、看取りに対する指針やマニュアルの整備、看取りの研修等を行う予定である。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	研修で知識はあるものの実際に適切な対応ができるかとの不安がある。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を日常的に防火管理及び消火、避難訓練等を実施することにより、全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。 また、火災等を未然に防ぐための対策をしている	年2回の避難訓練の実施。今期はコロナ感染防止の為、消防署の立ち合いは行わずスタッフのみで行った。総合的避難訓練の必要がある。	ホームでは自主訓練による年2回の避難訓練を実施している。入居者も参加することで、より実践に近い形での避難訓練が行えている。避難訓練毎に消火器操作訓練を行うことで、全ての職員が消火器の使用方法を理解している。	避難訓練は日中を想定した訓練を実施している。今後、限られた人数しかいない夜間帯を想定した訓練についても定期的に実施することが望ましい。また、自然災害が増加傾向にあることを踏まえ、自然災害想定した訓練を実施するとともにBCPの策定と運用を見据えた今後の取り組みに期待する。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	理念の中に「優しい声掛け」とある。言葉の掛け方、何気ない言葉が相手には不快にはなる事を念頭に認知症を理解した上で尊重し思いやりのある言葉掛けを心掛ける。	夜間帯における居室の扉は入居者毎に意向を確認し、完全に閉めたり、少し開けておくなど、個別に対応している。職員が時折、強い声掛けになる事が有る為、職員が互いに注意し合いながら、入居者の尊厳を尊重した声掛け・対応を行うよう努めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	自己決定がしやすいように支援する難しい様であればいくつかの選択肢を提供し本人が納得出来るように分かりやすく説明をする。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	個々の生活ペースを優先しているが、皆様同じ空間で過ごされる事を好まれている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	衣類の選択は出来る方にはお願いしている。但し、気候や季節に合わないと判断した場合には交換する事を提案。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	感染対策の為、一緒に準備は出来ないが食事を一緒に食べている。食事介助を要する方にも出来るだけ自分のペースで食べて頂いている。	食事はホームの職員が調理して提供している。コロナ禍以前は、役割分担表を作成し、職員と入居者が一緒に準備や片付けを行っていた。入居者がホームで役割を持つ事で本人のやりがいや笑顔が多く見られることに繋がっており、コロナ収束後には再開する予定である。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	献立表、カロリー計算のされた食材が届き摂取量のチェックを行っている。 個々に合わせた形態や容器を利用し提供。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	定期的な歯科往診があり。 毎食後の口腔ケアの実施は必要な方は付き添いや介助をしている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄パターンシートを活用しトイレでの排泄を目標とし声掛けを行っている。	ホームでは職員が入居者個人の排泄のタイミングに合わせた声掛けが行えるよう排泄パターンシートを活用している。入居者の体調や身体状態、時間帯などに合わせて使用具を変更するなど、排泄の自立に向けて取り組んでいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	好みの乳製品の提供や下剤・調整剤の処方などでコントロールしている。又、水分補給や適度な運動を心掛けて取り組んでいる。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	受診などの都合で入浴日に変更する場合もあるが、入浴順番はタイミングをみて言葉掛けをしている。	ホームでは原則として1週間に2~3回、午前中に入浴する時間を設けている。入浴拒否のある入居者に対しては無理強いせずに時間や日にちを臨機応変に変更し対応している。入浴リフトを整備し、必要に応じて使用する事で車いすの入居者も安心して浴槽に入れるよう工夫している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中はリビングで過ごされているが、昼寝の時間を設けて体操やレク等の適度な運動を行い夜間の安眠に繋げている		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	お薬手帳で薬の把握は出来るようにはしているが、変更があった時に確認している。服薬前に名前を再確認し誤薬がないように細心の注意を払っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	それぞれの残存機能を活かした「出来る事」を目標に役割分担を行っている。必ず「有難う」「助かった」などの言葉を添えるようにしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍において外出は控えていたがご高齢の方も多く外出希望される方も少ないが揃って花見ドライブへ出かけたが季節を感じて喜んで頂けた。	現在、コロナ禍により外出する機会は減少したものの、病院受診の帰りにドライブしたり、車から下りないように花見に出かけたり、テラスで日光浴を行うなど、ホームに閉じこもらないよう配慮している。管理者はコロナ禍収束後には近隣神社への散歩や本人の希望に沿った外出などを計画している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	少額のお金を持たれる方もいらっしゃるが、必要なものは立て替えで購入しご家族様へ請求している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	毎週ご家族様から電話を下さいますが、先方にも近状を訪ねてからお取り継ぎをしたり荷物が届いた際にはお礼を本人様が伝えられるように支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	リビングは日当たりもよく明るい。テラスには鉢植えを置き花や季節を感じて頂ける工夫をしている。	新型コロナウイルス感染症対策として、手指消毒の徹底と定期的な換気を実施している。共用空間のホールは職員が毎日掃除機掛けとモップ掛けを行い、清潔が保たれている。ホールの壁面には入居者と一緒に作成した季節の飾り付けがあり、テラスにも季節の鉢植えを置き、季節の移ろいを感じさせる工夫がある。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファーや和室に座椅子などに座って頂けるようにしている。テレビを見たり、歌をタブレットで聞かれたり思い思いに過ごされている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には自宅から持ち込まれた寝具を使用されていたりレクなどで作成した作品やメッセージカードなどを飾っています。	居室は職員が毎日掃除機掛けと1週間毎にモップ掛けを行い、清潔保持に留意している。居室には入居者の使い慣れた布団などを持ち込み、本人の意向や動線を考慮し家具等を配置することで、居心地の良い空間となっている。室温は入居者の意向を確認し、個別に調節している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	自室と認識できるように表札に目印になる飾りを取り付けたりコールの押せない方には身近にハンドベルを配置し工夫している。		